

# 諸行無常偈といろは歌

小 笠 原 秀 實

(本校教授)

## 一

「諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂」は、ご存じの通り、涅槃經の捨身聞偈の物語に出てゐる偈であります。考へて見れば見るほど、深い意味が含まれてゐると私は思ふのであります。殊に經の二句、生滅々已寂滅爲樂は菩薩が一身を鬼神に供養してまで聞かれたと云ふほど、貴重な思想が含まれて居るやうに思はれます。それはたゞ抽象的な思想の原則として、云はゞ幾何學の公理、定理を説明されるやうな冷靜な叙述として聞くことが出来ても、尙深い感銘力を持つほど、確實な眞理を持つてゐるのであります。涅槃經の說相に於ては、特にそれが具體化され、眞理に對する眞摯なる探究者としての菩薩と、眞理の爲には全肉一身を捧げ盡してもかまはないと云ふ熱情と、かくして求め得られた眞理の永遠性とが、讀む者、聞く者をして、誠に感激の高處に運び去るのであります。

## 二

「萬有は流る」(Panta rei)は希臘のヘーラクレイトスの思想であります。これは甚だよく「諸行無常」の考と似てゐるやうであります。尤も之れは精密に同じと云ふものではありません。印度と希臘とは同じアーリアンの系統ではありません。東と西とに分れましてから、相當長い年代を経てからの思想であります。

殊に「諸行無常」の「行」の意味は甚だ複雑で、又多義を含んでゐるとの事です。或は衝動意志的のもの、或は單純な働力的なもの、或は客觀存在を構成するに到る要因的なもの、或は苦樂の根源になるもの等、知情意の三面

に關して、多義的のものであるらしい。さうしたものを、ヘーラクレイトスの「萬有」に配すると云ふことは、甚だ當を得ないにも存ぜられるのであります。さうした關係で、二つの思想の類似を、極めて細部にまで及ぼさうとは思つてゐないのであります。

然しアーリアンの母幹の共通から、思辨の類似性が全く無いとは云はれないのであります。もとより萬有が流れ移り、諸行がたえず變ると云ふやうなことは、思辨的傳統の如何なるものをも豫想しないで當然知り得る一般的思辨原則でゐるとも申されませう。例へば支那に於てさへも、天地地人事すべてのことは易理に外ならぬと、易とは萬有悉く移り變はることを意味すると云ふことです。之れほど一般的ではありませんが、易などの思辨的必然と整へますと、「萬有は流る」と、「諸行無常」とは一さう近い關係にあることが容易に了解されるのであります。

更に「萬有は流る」に對する實踐的處理に關しましては、「諸行無常」に對する實踐的解決と甚だ類似的であります。萬有は流るのでありますが、その間に一定の格調があり、神理とも名づくべき合理的法則がある、このものに隨順して精神の靜平を獲得するのが人間の幸福であり、道德的實踐であると云ふのでありますから、その期する處は、安心喜悅の淨樂にあると考へることが出來ます。詳言しますならばヘーラクレイトスの解説論は「普通のものに従へ」であります。そして人間は多く個人本位の考を持つて居るので、云ふこと、爲すことが恰も眠つてゐる人のやうに統一のない出鱈目が多い、覺めた人々は共通の世界を持つが、眠れる人々は世界を自分だけのものにしてゐるのです。この普通共通界は、相對的紛糾を去つて善惡邪正が一つになる世界であります。「萬法は一如」(All things are one)とか、「善惡は一如」と云つて居ります。そして又「神にとつて、萬有は正、善、美であるが、人間には正邪である」と云ふのもこのことです。かゝる一如界進むには一大理法を認識してこれに従ふのでありますが、之れには大死一番を要するのであります。即ち「生滅、滅し已る」底の飛躍を要するのであります。「斷簡」中に残つて居ります「大死、大益分を獲得する」(Greater deaths win greater portions)はこのことを指すのであると存じます。

### 三

一「萬有は流る」、二「大死一番」、三「普遍理法の認識」、四「神の正、善、美」この四個の提言を綴り合せますな

らば、ヘーラクレイトス思想のみならず、希臘並びに全歐羅巴哲學思想を通貫する一大思想脈の眞髓を把握し得るようには、私は信ずるのであります。そしてこのことが、今主題として取上げて居ります「諸行無常、是諸滅法、生滅々已、寂滅爲樂」と、思ひかけなくも甚だよく似てゐることを見出すのであります。「諸行無常、是生滅法」は一の「萬法は流る」であります。「生滅々已」は、二の「大死一番」であり、又このことに依つて認識し得るゝ「全法界常住の理」即ち三の「普遍理法の認識」であります。「寂滅爲樂」は、四の理想境即ち「神の正、善、美」の實現に外ならぬのであります。この一脈の思想系統が全歐の願はしき思想傾向の一面を發揮して居りますやうに、我が四句偈の根本思想も我が國に於ける願はしき思想の一面を代表致しますのみならず、全東洋の願はしき思想の一大潮流を遺憾なく表示してゐるのであります。

更にこの四句偈を組織的に解釋しますならば、「諸行無常、是生滅法」は、理性的認識であり、客觀的實在のあるがまゝなる姿の理解であり、云はゞ、實踐に對する正しい知識的基礎を提示してゐるものでありませう。即ち正しい客觀の認識をすべての基準にして居るのでありまして、すべての活動の根據とならねばならぬものであります。

次に「生滅々已」は現實的、又現象的不安を脱却する實踐方法の指示であり、云はゞ本來、不安を感じるべからざる大除法に、小我見を基礎にした不安を懷いたのでありますから、更にこの我見的判斷を中止し、停止し、不安なき大除法に歸るべきことの指針表示であります。即ち本來不生の眞理法に、マイナスの負數を掛けたのでありますからもう一度マイナスを掛けて正數に戻さうと云ふ運算式のやうなものでありませう。これが「大死は大益分を得る」の眞理であります。かくて到達されるものは消極的なニヒルではなく、「寂滅爲樂」であり、淨樂そのものであり、ヘーラクレイトスの「神に於ける正、善、美」であり、あらゆる價値の根源であり誠に無關心的至上價値の藝術境であり蘭林遊戲地の風光であり一切の究極であります。かうした大きな考へが四句十六字に表示要約されてゐることは、寧ろ奇蹟的であると云つてもいいやうに思はれます。

#### 四

さて終りに申上げたいのは、この四句偈の邦譯と考へられてゐる「いろは歌」についてであります。作者又は譯者

と申しますか、之れは空海、弘法大師であると云ふやうに云はれて居ります。これには異説があつて明瞭ではありません。空海説の有力な證據は、凌雲集に出てゐる仲雄王の「謁海上人」の詩であります。「字母弘三乘、眞言演四句」の二句でありまして、「字母三乘を弘む」は悉曇に依つて佛法を弘められたことであり、「眞言四句を演ぶ」は四句偈を「いろは歌」にされたことであると云ふのであります。これには七五調の使用は、弘法大師時代としては早過ぎると云ふ疑もあり、その他色々の疑問がありますが、直接の疑問としては「眞言」「演四句」が、歌（眞言）のことであるか、又四句がこの偈のことであるか、そのことは尙確定的と云はれないやうに思はれます。私の問題にしたいのは、この場合作者の問題ではなく、譯し方の問題であり、思想内容についての問題であります。

古來この翻譯は誠に名譯と思はれてゐます。そして同字を二度使はず構成されてゐる非凡な技術に感嘆されてゐるのであります。これは困難な二つの技術が巧みに成就されてゐるので一さうこの驚嘆を大きくしてゐるのであります。然し思想そのものの理解と普及とは、何にも増して重要であると云ふ立場から、かりに内容だけを分けて考へて思ふと、必ずしもこの偈の眞髓とするもの、又ひしびしと迫り來る眞理性を以つて、靈魂を驚倒せしめると云ふ表示は不幸にして「いろは歌」にはもられてゐないのであります。かりに捨身聞偈の菩薩が、後の二句の翻譯「うゐのおくやまけふこえて、あさきゆめみしゑひもせす」を聞いて、即座に肉身を鬼神に捧げることが出來たでせうか。「まあ約束だから仕様がな」と云つた程度のもので、法悦のあまり、思はず一角を供養すると云ふ緊張性が浮んで來ないやうに思はれます。それは格別緊密な一句四言と云ふ詩形が五調と云ふ甚だ伸びやかな、やゝもするとだらしない調子に變つてゐるからと存ぜられます。どう云ふ關係か、雅樂、越天樂に歌詞をつける場合は、「いろはにほへとちりぬるを」を歌ふことになつてゐるようです。まことに伸びやかで、靜かで越天樂にはよく乗るのであります。眞隆探求の爲、捨身聞偈したいと云ふ菩薩の情熱とは蓋し縁の甚だ遠いものであります。

何よりも先づ、「いろは歌」を聞き習つて、初めて意味の解る方はあまり無からうと存じます。現在の理くのと譯書も、讀んで意味の通ずるのは甚だ乏しいのでありますが、私の幼年時代より讀習し居りますこの歌も、殆んどそれと同じ程度の晦澁性を持つてゐるやうに思ふのであります。第一、幼年時代には、私は「いろはにほへとちりぬる」とは

讀まず、「いろはにほへと、ちりぬるをわか、よたれそつね、ならむうるの」と云ふように讀んで居りました。これで意味の通じる筈はありません。これが四句の同様であると云ふことを知つたのは、我が國語を、國語として學ぶ時代よりも、國文學として學ぶ時代にはつきりしたのであります。云はゞそれは晦澁であり、迫力の無いものであります。これが東西數千年に亘る一つの眞理の脈を端的に明示して居るものであるとは、夢にも存じませんでした。

理屈を云へば、「諸行無常、是生滅法」は成るほど「いろはにほへとちりぬるを、わがよたれそつねならむ」に當るのであります。然しそれにしても「生滅々已、寂滅爲樂」が最も重要なる眞理の轉回點でありながら、「うるのおくやまけふこえて、あさきゆめみじ、ゑひもせず」では、醉生夢死の間をおぼつかない歩きまはる感が無いでもありません。「夢も見ん」「酔ひもせん」と云ふのですから一大覺醒の状態が躍動すべきであります。一向表現に精極性がなく、この頃よく聞きます粘液質の神經疲勞の「あれでもない、これでもない」に、氣分がよく似てゐるやうに存じます。原文は「寂滅爲樂」として積極的に寂滅界の淨樂を高らかに提示してゐるのであります。

これは些末のことのやうであります。が、佛教の理想とする涅槃なるもの、寂滅なるものが、やゝもすれば消極的のものであり、人間拒否のものであるかの考を懷かれ易い傾向に對して、拍車をかけるものでありますから、特に注意したいのであります。

## 五

上來申し上げましたやうに、諸行無常の四句偈は、單に佛教の外ならず、東西兩洋を通じて、最高思想の光輝ある表示の二であります。その含有するものは甚だ深長であります。このもの邦譯として「いろは歌」が採用されると云ふことは、これが一般に親しまれてゐると云ふ關係上、佛法他事にあらず、即今目前にあり、而も七歳から習つてゐるものであつたと云ふ親密性を思はせる點に於ては、有意義にも思はれますが、然しその思想があつたものであり、その表現に於ても緊張性、向上性のないものであることを思はせる點に於ては、甚だ寒心に堪えぬものがあります。

「諸行は無常なり」

これ生滅の法なり

生滅し已つて

寂滅を樂しみと爲す

と云ふ訓讀は既に立派な國文であります。この形に於て、この思想を領解させると云ふことは、「いろは歌」を通してよりは、もつと人間的に有効であると存じます。これらは多く佛教語でありますが、これらの佛教語は、スコラ學的意義は別として、一千數百年に亘つて我々の精神を涵養し來たものであります。このことへの理解も甚だ重要であると存ぜられます。

たとへばこの四句の内、内容的に最もむづかしいことの一つは寂滅と云ふことであり、又單に寂と云ふことでありませう。そしてこの寂は國文學上の中心情趣の寂であり、一千年に亘つて磨き上げられて來た文化の粹であります。我々相互の心身を崇高なものに導く、重要な一路であります。輕跳浮薄に亘らざる性格涵養の爲に、正しく且つ有意味に古典を領解したいと思ふのであります。